

## 第3章

### 『しずかな生活』に見る「しあわせ」感

清水 郁郎 大同工業大学工学部建築学科准教授

#### 1. 映像による「多様な思い出」表現の可能性

今回お見せする作品は、トヨタ財団の助成により 2006 年から 2007 年にかけて制作したもので、テーマはエイジング(老い)です。

私は院生として総研大の国立民族学博物館に在籍している間、映画に関する研究会に参加して、かなり活発な議論を交わしていましたが、それぞれ職場や進路が変わったりという事情で、実際の制作を手がける機会に出会えませんでした。今回、それがトヨタ財団の協力で実現できたわけです。

まず映像作品を紹介する前に、制作までの経緯と背景について触れておきたいと思います。

総研大時代のフィールドワーク（1996～98年）を通じて、「しあわせ」感のギャップを感じていました。そして、そのことを映像を通じて表現したいと思うようになりました。今日の映像の登場人物は、ビルマの少数民族の人々です。彼らのビルマ時代に住んでいた地域で体験したことは、記述できることとできないことがあります。そのライフヒストリーを映像で表現できないかと考えました。

また、民博の共同研究で『「思い出」はどこにいくのか？：ユビキタス社会の物と家庭に関する研究』に参加しました。これは現在も継続中です。思い出にはいろいろな切り口がありますが、しばしば、素晴らしい思い出が牧歌的に語られます。もちろんそれも非常に大切ですが、私はそうした

「思い出論」に違和感があり、思い出したくないこと、語りたくないことも現存在にとって重要で、暮らしのベースになっているのではないかと考えました。そういう意味での「思い出の多様性」を映像を通じて探ってみたいと思ったのが、作品制作のきっかけになりました。

## 2. 『しずかな生活』(DVD、25分、HDV)について

この作品は、タイのチェンライ県の山地で暮らす少数民族、アカの一族の老夫婦(夫71歳、妻60歳)に焦点をあてています。夫婦の日々の生活の断片と、それぞれに対するいくつかのインタビューから構成されています。

北タイのアカのなかでロウミと呼ばれるサブ・グループに属する人びとは、その多くが、過去30年ほどの間に隣国ミャンマー(旧ビルマ)からタイにたどり着きました。

それ以降、山地に定住化した現在に至るまで、生活自体は必ずしも容易ではなかったように私には映りました。それは、ここで焦点をあてた老夫婦に関しても同様でした。



しかし、当の老夫婦は、タイでのこれまでと現在の生活が「この上なくしあわせだ」と言います。このギャップは何だろうか。老夫婦にとっての「しあわせ」とは何かを探りたいとの思いから、この作品の制作は始まりました。

彼らは、近年は、タイに暮らし始めたころより、物質的にははるかに豊かになっています。また長年の不安の種だった国籍や土地も取得できました。しかし、同時に、この老夫婦が生きる小さな社会は、多くの悩みを抱えるようになっています。たとえば、季節に応じて次々と農産物をつくり変えつつ、一定の収穫をあげなければならない生活が1年を通して続き

ます。

同時に、自らがよって立つもっとも大切なものだと主張していたはずの祖霊、精霊信仰は失われたり変容したりして、象徴世界のありようも大きく変わりました。多くの若い世代が村を後にし、都市や外国で生活の糧を得るようにもなっています。親子の間や祖父母と孫の間で、会話が成り立たない状況さえみられるようになってきました。こうしたさまざまな変化の渦中にいながら、今を「しあわせ」だと語るその内実を、夫婦の過去と現在から浮かび上がらせたいと思います。

⇒映像紹介

### <質疑応答>

大森 若い人のブームかもしれませんが、文字が入るとき、映像はカットされ、ブラックになりますね。これが少し気になりました。映像がなく文字だけだと抽象的になり、一連の流れの中で断絶が多くなる気がします。それはあまり使わない手法だと思うのですが、一種の流行でしょうか。

清水 一般の方法を代表しているわけではありませんが、最初は編集のときブラックの方法は使いませんでした。そうすると場面をかなりたくさん入れなくてはならなくなり全体が長くなるので、今回のテーマに直接関係ない細かいシーンなどは省略して、文字で表現したほうが理解しやすいと考えました。それで全体の作品の長さを調整しました。本当は、ブラックの手法は使わないほうがいいのかもしれませんが。

大森 文字を入れることに抵抗はないのですが、背景を真っ黒にする必要はないのではないかと感じるんです。場面の変わり目に文字が入っていてもかまわないと思うのに、あえてブラックにする理由はどこにあるのか。最近よく見かけるので、一種の流行かなと思ったわけですか。

清水 編集ソフトに最初から入っているのので、使いやすいという面はあります。

平田 これは民族誌映像ですか。

清水 何とでも解釈はできますね。私はもともと建築が専攻なので、暮らしの映像とも言えますし、人類学の映像とも言えます。

平田 建築の教育分野で映像は使いますか。

清水 まだ映像は教育研修の分野では活用していませんが、いずれ始めたいと思っています。ぜひチャレンジしてみたいし、建築分野での作品も作りたくと考えています。

大森 客からの要望を取り入れて、建築物をCGで立体的にシミュレーションして見せる建築家も出てきています。映像で見せると、客に説明しやすいですね。

平田 たとえば極地研の建物も移転で壊されてしまう予定ですが、壊される前に、どんな状況で、誰がどんな研究をしていたかなどの様子なども映像記録にとどめておければと思います。そういう意味で多様な使い道があるでしょう。

清水 建築写真の分野では、ハードの性能が向上しているのので、写真ではなく映像で撮影し、写真に落とすという方法も実際に行われています。ですから、映像メディアはこれから建築分野では広がっていくはずです。私もこの分野に取り組んでいきたいと思っています。